

ヤング グッドマン ブラウン

N. ホーソン
(望月善次訳)

陽も落ちようとする時、ブラウンはサレムヴィレッジの通りに姿を現した。しかし一度玄関を出てから、妻と別れのキスを交すために、再び踵を返した。彼の妻は、人や物を完全に信ずることを表わす Faith という名前であった。彼女は、その可愛らしく美しい顔を玄関の外へのぞかせた。フェイスが夫に話しかけている間中、彼女の帽子のピンクのリボンは風に揺れていた。

「ねえ、あなた、お願いですから旅行は明日の朝まで延ばして下さいな。今夜は、御自分の家でお休みなさいな、一人寝の女は、色々な夢にうなされたり、色々な思いにかられるものですわ。ですから、あなた、どうか今晚だけは出かけないで下さいな。」フェイスは、甘く哀しげに夫の耳に囁いた。「ねえ、お前、僕の方も、どうしても出かけなきゃならないんだ。お前は、旅行っていうが、本当は旅行なんてものじゃあなく、只ある所へ行行って帰ってくるだけなんだよ。こいつは、どうしても、これから夜が明けるまでにすまさなくちゃならないんだ。ねえ、フェイス、お前はもう僕のことを疑うのかい。僕達は、まだ新婚3カ月なんだよ。」「そう、じゃあ、しかたがありませんわ。でも、どうか無事で帰って来てちょうだい。」彼女がそういった時、ピンクのリボンが揺れた。ブラウンは思わず叫んだ。「アーメン、お祈りをして、夜遅くならないうちに寝ておしまい。そうすりゃあ、何も心配することはないんだよ、フェイス。」

こうして、二人は別れたのだった。ブラウンは、どんどん進んで行った。が、集会所の角を曲ろうとして振返ると、フェイスがまだピンクのリボンとはいかにも似つかわしくなく憂いに沈んだ様子で自分の方を見ているのがわかった。「かわいそうなフェイス!」彼は心に傷みの走るのを覚えた。「こんなことの為にあいつを置き去りにしてくるなんて、僕はなんて卑法な奴なんだ。あいつは夢のことを言っていたなあ。まるで、今夜何が行なわれるかを、夕べの夢の中で見たかのような心配振りだったなあ。いや、そんなはずはない。もし、本当に今夜何が起るかを知っているなら、あいつはぶっ倒れちゃうはずだ。何て言ったって、あいつはこの世の天使さ。今夜のことがすんだら、死んだってあいつと離れる様なことはしないぞ。」

こう未来についてのけなげな決意をするや、ブラウンは、その忌しい目的のために更に歩を速めようとした。彼は、もうずうっと気味の悪い道を歩き続けていた。その道は、こんもりした森の木々で暗くなっていた。木々は彼一人が漸くかき分けられる程に茂っていて彼が通るや又、草木でたちまち閉じられてしまうのであった。その道は、人気のない本当に寂しいところであった。しかし、人気がないと言っても、その周りを囲んでいる沢山の木の陰や、頭上に垂れてくるこんもりとした枝の中には、誰かが隠れているかも知れぬ様な感じを与えるところだった。だから、ブラウンは、その目に見ることができぬ大勢の人々の間を足音を忍ばせながら通りすぎたのであ

った。

「一本一本の木の陰には、悪魔の様なインディアンが隠れているかも知れないな。」とブラウンは一人言を言い、自分のうしろをこわごととふり返りながら言葉を続けた。「インディアンどころでなく、本物の悪魔が僕のすぐ側にいるかもしれないなあ。」

彼は後ろをふり返りながら、道の或る角を曲り、今度は前の方を見た。すると、そこに一人の男の姿を認めた。男は、地味ながら見苦しくない身形をして古い木の根元に座っていた。その男は、ブラウンが近づくや立止まり、二三步彼の方に進んで来た。

「遅いぞ、ブラウン。集会堂の時計は、わしが、ボストンから来た時に鳴っていたぞ。おまけにそいつは、もう15分も前のことだったぞ」「フェイスの奴にひきとめられたんですよ。」ブラウンは震えながら言葉を返した。その震えは、この男が、突然姿を現したことによるものだった。もっとも、この男の現れるのを、ブラウンが、予期もしていなかったなどと言えば、嘘にはなるのだが…。

森の中は、今や真の闇であった。そして、この二人の歩いているところは、その森の中でも最も暗いところであった。見分けのつく限りでは、この第二の男は、五十位の年恰好であった。男は、ブラウンと同じほどの暮し振りをしている様であったし、容貌というよりその表情がブラウンに似ている様であった。相変らず、二人はどんどん歩き続けていた。その年配の方の男は、身形も物腰も、若い方の男と変らぬ飾らぬものであったが、若い方の男にはない何とも言い表わし難い雰囲気をもっていた。つまり、世間というものを知り抜いていて、例えば、仕事の必要があつて、王や大臣達と食卓を共にする様なことがあつても、決してまごまごしたりなどはしないであろうという雰囲気をであった。その男について異様な点は、その杖であった。杖は大きな黒い蛇に似ていた。しかも、それは非常に巧みに作られていたので、まるで生きている毒蛇が身をよじらせていると言ってもよい程であった。もっとも、この杖が生きた蛇の様に見えたのは、その定かでない光による目の錯覚に相違ないのであるが…。

若い方の男は、ゆっくり歩いていたのを完全にやめて立止まった。「もうし、ここであなたに会うという約束は守ったんです。ですから、僕は、やっぱりひき返したいんですよ。あなたの知っていることに関わるのは、どうも気が進まないんです。」

蛇の男は、少し離れたところから、微笑みながら、言葉を返した。「まだそんなことを言っているのか、ブラウン。はっきりとケリのつくところまで行こうじゃあないか。わしは、お前が、引返すなんてことはないと思うねえ。第一、まだいくらかも進んでいないじゃあないか。」「いいえ、いくらかどころじゃあ、ありませんよ。」と若い男は叫んだが、足の方は思わず又歩きはじめていた。「父は決して、こんな目的の為に森に入ろうとはしなかったし、父の父もそうだったと思いますよ。我家は代々正直の家柄で、ずうっと善きクリスチャンだったんです。私は、最初のブラウン家の男にさせられるんです。こんなところを通り、こんな……」「こんな奴に関り合うって、お前は言いたいんだろう。」年とった男の方は、もう一方の男の顔をじっと見て、ちょっと息をついで又言った。「よく言ってくれたブラウン！実はな、わしは、他のピューリタンの人達と同様、お

前の家の者をも、よく知っているのだ。決して、いい加減なことを言っているのじゃあないぞ。わしはな、お前のおじいさんを助けたものだ。お前のおじいさんは、巡査でなあ。当時、サレムの街で、キューカーの女を、こっぴどく答でやったものじゃ。又、お前の父親は、フィリップ王戦争の時、インディアン部落を焼き払ったんだが、その時、火のついた松明を父親に渡してやったのも、このわしだったのさ。彼らは二人共わしの友達さ。二人共、喜んでこの道を通り、又、真夜中も過ぎた頃、御帰還になったものさ。だから、おじいさんやお父さんの為にもわしは、喜んでお前と友達になろうと思うのだよ。」

「おっしゃることが、もしも本当なら、父や祖父がそんなことは一言も言わなかのは、おかしくないですか。いえ、おかしくも何ともありませんよ。第一、そんな噂は、このニュー イングランドの地では、これっぽっちもありませんよ。何と言っても、我家は代々祈りの民ですし、その上、善行の民ですよ。そんな邪悪なことに我慢できるはずがありませんよ。」くねくねとした杖をもった男は言った。「邪悪であろうとなかろうと、わしは、この土地じゃあ、顔が広いんでなあ。ある教会の執事さん達とは、聖餐の葡萄酒で一杯やったものさ。州のおえら方の集りではな、連中はわしを議長にしたものさ。それに全体会議の大部分も、わしの支持者だからねえ。それどころか、総督とわしの間柄はな——まあ、こいつは、国家の機密というものだなあ。」「そんなこと、本当なんですかねえ。」とブラウンは叫んだ。しかし、内心では、自分の相手の落ち着き払っている様子に驚いていた。

「でも、おえら方や全体会議なんて、私には関係ありませんね。まあ、あの人達には、あの人達のやり方がありますよ。私の様な人間には何の関係ありませんよ。でも、もしも、このままあなたと一緒にいくとしたら、サレム ヴィレッチの執事さんや牧師様の眼を、どうしてまともに見られるものですか。きっと、安息日や説教日の牧師様の声には私は震えてしまいますよ。」

それまで年配の方は、真面目そうに話を聞いていたが、これを聞くや思わず吹き出してしまった。男が、余り、激しく身を震わせたので、その蛇の様な杖は、生きてでもいるかの様に、くねくねとしたのであった。「ハッ、ハ ハ…」男は何度も激しく笑った後、やっと気を取り直して言った。「まあ、いい。ミスター ブラウン、続けたまえ。続けたまえ。でも、まあ、お願いだから、わしを笑い殺さないでくれよ。」「まあ、これっきりにしますがね。」ブラウンは、どちらかと言えば、むっとして言った。「ところで、私の妻はフェイスと言いますが、あなたと一緒に目的地まで行くのを知ったら、あの、可愛らしい、ちっちゃな心臓が壊れちゃいますよ。あいつの心臓が壊れる位なら、自分の心臓を叩き壊した方がましですよ。」

「ブラウン！本当にその通りなら、まあ好きな様にするんだなあ。わしだって、わしらの目の前で足をひきづっている老婆の二十人に代えても、フェイスにはひどい目に会って欲しくないのだ。」

男は言いながら、先の方を歩いている一人の女を杖で指し示した。そこには、敬虔で立派な女性、つまり、ブラウンに幼い時、教義問答を教えてくれ、今でも牧師やグーキン執事と共に、その道徳上、精神上の導き手たる女性がいたのだった。

「クロイズさんが、こんな夜更けに、しかもこんな人里離れたところに居るなんて！すみません

が、僕はあの信心深い婦人を追い越すまでは、この道からそれて、森の中を突切って行こうと思いますよ。あの方は、あなたは知らないでしょうが、僕には尋ねるかも知れませんが。誰と一緒に、何処へ行こうってしているかってね。」「それもよかろう。もっとも、わしはこのまま行くがね。」

こういう訳で、若い方の男は、脇道へとそれた。しかし、連れの男の方を注意深く見守っていた。その男は、自分が杖を伸ばすと、すぐ届きそうな距離にまで、その女性との距離を近づけるべく、足音を忍ばせて進んで行った。一方、女の方は、老齢の女性にしては異常な速さで道を急いでいた。そして、絶えず、おまじないの様な何かはっきりしない言葉をつぶやいていた。男は、杖を伸ばし、蛇の尻尾のように見えるところで、その女の生気のない首に触れた。

「悪魔だ！」とその信心深い老女は金切り声をあげた。「じゃあ、クロイズのかみさん。あなたは、昔なじみをよく覚えているってわけだな。」男は、彼女と真向い、そののたうっている杖によりかかりながら、女の顔を覗きこんだ。「なんです、お前さまだったんですかい。それにしても、私の古なじみによく似ておいでなこと。今のブラウン坊やおじいさんのブラウンさんにね。ところで、信じられます？どうしたことか、私の箒の柄が、どこかへ行っちゃったんですよ。きっと、あの首つりになりそになった魔女のコリーの奴が盗んだんだとは思いますがね。私が、セロリやキジムシロヤトリカブトなどの汁を塗っている間にね。」と女は叫んだ。すると老ブラウンの様な男は言った。「そうそう、それに小麦粉と生れたばかりの赤ん坊の脂身を混ぜてな。」「おう、おう、お前さまは、本当によくあの処方方を御存知じゃ。」老女は、きゃっ、きゃっとして声をあげながら言った。「そんなわけで、ごちゃごちゃ文句を言っていたら、集りに行く時間になっちゃいましたのさ。わたしは、馬がないもんですからね。歩いて行くことに決めましたのさ。というのはね、皆が今夜、素適な若者が仲間に入るっていうもんですからね。旦那、ちょっと腕を貸しておくなさいよ。そうすりゃあ、あっと言う間に着くでしょうが。」「さあ、そいつは難しかろうぜ、クロイズのかみさん。わしはな、お前さんに腕を貸すことはできぬのだ。でも、まあ、ここに杖はあるがね。」

そういうや否や、男は杖を女の足元に投げた。すると杖は、かつてその持主がエジプトの魔術師達に貸し与えた魔法の杖の如く、生命を帯びたもの、つまり蛇のようになったのであった。しかし、このことはブラウンの眼には入らなかった、彼は只呆然として空を見つめ、しばらくして、その眼を地上に転じたのであった。そこには隣人のクロイズさんも、蛇の様な杖もなく、只かの男のみが立っていたのであった。しかも男は、まるで何事も起らなかったかの様にブラウンを待ちうけていたのであった。

「あの老婦人は、僕に教義問答を教えてくれた。」と若い男はつぶやいた。この短い言葉の中には、実に様々な思いがこめられていた。

二人は更に歩き続けた。年配の方の男は、連れにもっと速度を上げ、あくまでも目的地まで進む様に説得した。その説得は、余りにも巧みであったので、その説得が男から出ているというより、むしろ聞き手であるブラウンの心の中から湧き出ている様であった。二人が進んで行く際に、

年配の男は、杖にする為に楓の一枝をもぎ取り、その杖から既に夜露で濡れていた小枝を取り始めた。男の指が小枝に触れると、不思議なことにその小枝は、まるで一週間もの陽を浴びたが如く、みるみるうちに干上ってしまった。

この様にして、二人は相当な速度で更に進んだ。しかし、或る道の窪みのところに来ると、ブラウンは突然切り株に腰を下し、これ以上はもう進まぬと言い張った。「もし、僕は決心しましたよ。」ブラウンは頑固に言った。「こんなことの為にもう一步だって動きゃあしませんよ。天国に行くに違いないと思っていた信心深い老女が、実は、悪魔の所へ行こうとしていたって、それがどうしたっていうんです。僕が可愛いフェイスのもとを離れて、あの女の後を追っかけて行かぬばならぬという理由があるというんです。」しかし、もう一方の男は、冷然と言い放った。「お前は、段々と思ひ直すに違ひあるまい。まあ、ここに座って、少し頭でも冷やすのがよかろう。お前がまた進もうと思えば、この杖が役に立つじゃろう。」

それ以上何も言わずに、男はブラウンに楓の杖を投げてよこした。すると、まるで消えてでもしまったかの如くに、その男は見えなくなってしまった。若い方の男は、しばらく道端に腰を下していた。そして、大いに我と我身を賞めそやしたのであった。つまり、ブラウンはどんなにか疚しくない気持で、朝の散歩の時、牧師様と顔を合やすことができるか、又、老グーキン執事の眼を恐れなくてすむかを考えたのであった。邪悪なことに使うはずであったこの夜を、清く甘いフェイスの腕の中で、どんなにか安らかに過すことができるかと考えたのであった。が、この喜ばしい賞讃さるべき冥想の最中に、ブラウンは、どんとどんと近づいてくる蹄の音を聞いたのであった。次の瞬間、彼は、森の中に身を隠した方が良いと思った。というのは、幸いなことに今はそれを取りやめたのだけれども、どんなに罪深い目的のためにここまで来てしまったかに考えが及んだからだった。

蹄の音と共に、それに乗っているらしい者の話声が近づいて来た。それは、話を交しながら近づいてくる年配らしい威厳のある二つの声であった。この二つの声は、若い男の隠れているほんの二三フィート先を通り過ぎる様に思えた。しかし、その特殊な場所の闇の濃さの為に、その旅人達も、その乗っている馬の姿さえも見ることはできなかった。その形らしきものは、道端の小枝などを払いのけたのであるが、彼らが進んでいるのに拘らず、空からは、一条の光さえも射すことはなかった。ブラウンは枝をかき分けたり、枝にすがって出来るだけ身を乗り出そうとしたりして身を伸ばしたり、縮めたりしたのだが、遂にその影を認めることはできなかった。その声は彼を非常に困惑させた。というのは、そんなことはあり得ようもないことなのに、ブラウンは牧師とグーキン執事との声を聞いたからだった。その二つの影は、どこかの教会の会議か按手式にでも行こうとしているかの如く、静かに馬に揺られて行ったのだった。しかも、その声が、まだブラウンの耳に届く距離のところ、馬に乗っている一人が、木の枝をもぎ取ろうとして立ち止まった。「牧師様」と執事の様な声をした。「按手式か、今夜の会合かの二つに一つだと言われれば、按手式の方をごめんこうむりたいですね。今夜の仲間の或る者は、ファルマスやその向うから来るはずですし、又或る者は、コネティカットやロードアイランドから来るのだそうですね。

おまけにインディアンの呪い師も何人かは、来るそうです。あいつらは、あいつらなりに、我々仲間の一番上手な連中と同じ程の魔法の腕だそうですよ。おまけに、今夜は素適な若い女が仲間に入るということですよ。」「その通りですぞ、執事殿。」牧師らしい年かさの威厳のある調子で、もう一方の男が答えた。「急ぎましようぞ。さもないと遅れますぞ。私共二人が着かねば、何も始まらないのは、あなたのよく御存知の通りですぞ。」

再び蹄の音がした。がらんとした大気の中に怪しくも響いた声は、森の中を進んで行った。その森は、クリスチャンたる者は、一度たりとも集会を開いたことがなく、唯の一人と言えどもそこで祈りを捧げたことのない所であった。それでは、この二人の身分の高い人は、異教の荒野深く、一体どこへ行こうとしているのだろうか。ブラウンは、今にも地面に落ちようとする身を支える為にしっかりと木の枝をつかんだ。それは、過労と深い心の悲しみとで気が遠くなりかけていたからだった。彼は思わず空を見上げた。そこに本当に空があるのかと思ったからだった。しかし、そこには確かに青々とした半円があり、たくさんの星がそこで輝いていた。

「頭上天、地上にはフェイスがいるじゃあないか。まだ悪魔と闘うぞ！」とブラウンは叫んだ。彼が依然として深く広がる大空を見上げ、祈ろうとして両手を上げていると、風もないのにかたまりの雲が天頂を駆けめぐり、星を隠してしまった。青々とした空は、真上のところ以外ではまだ見る事ができたのであるが、その真上のところから黒い雲のかたまりは北へ向いて走り始めた。すると、その空の深みの中から出て来るかの様に、何の声か定かにはわからぬ声が聞えて来た。はじめ、ブラウンは、自分の町の人達の声を聞いた様な気がした。つまり、男達や女達、信仰厚い者やしからざる者、聖餐台の側で会った者や居酒屋で会った者達の声をであった。しかし、その声は、非常に微かなものであったので、彼は、風だけが鳴っているこの古い森のつぶやきを聞いたのかとも思ったのであった。その時、再び、その聞き覚えのある声がよりはっきりと聞こえて来た。しかし、その声は、今までサレムヴィレッヂでは、いつも明るい時に聞くのが常であり、只の一度たりといえども、夜の雲の中からも聞こえて来たことのないものであった。その声の中から、一人の若い女の声が、はっきりと聞こえて来た。それは、悲しみの声を挙げながら、しかも、本当に悲しんでよいのかわからぬかの様に、何か或る恵みを懇願している声であった。もっとも、その恵みを実際に手に入れることが、できたとしたら、彼女は悲しむではあろうが…。次の瞬間、はっきりとは目に見ることのできぬ全ての人々、聖なる者も罪ある者も、彼女を前に進み出る様に勇気づけたかに思えた。

「フェイス！」とブラウンは、苦悩と絶望とに満ちた声で叫んだ。森のこだまも、まるでうろたえた魔女が森じゅうをフェイスを探しまわっているかの如く、「フェイス、フェイス」と叫びながら、彼を嘲笑った。

この不幸な夫が、答を聞かんと息をこらした時、自制心を失った怒りと恐怖との叫びがその夜の闇を刺し貫いて行った。しかしその絶叫は、たちまち、はるか彼方での笑い声と変わり、やがて声高なつぶやきとなって消えて行った。するとたちまち、黒い雲が晴れ渡り、ブラウンの頭上には、青々とした静かな空があらわれた。その時、空中から、何かヒラヒラとするものが落ちて来

て、木の枝にひっかかった。若い男がつかまえてみると、それはピンクのリボンだった。

「僕のフェイスは行ってしまった。」と若い男は、呆然としながら叫んだ。「この地上には、もう善などない。善がなければ、悪も罪もない。悪魔よ来い。お前の為にこそこの世は捧げられたのだ。」

絶望に狂って、ブラウンは声高く長く笑った。そして、杖をにぎるや再び進みはじめた。異常な速さで進んで行ったので、彼は、森の中の道を歩いたり走ったりしているというより、むしろ飛んでいるように見えた。その道は段々荒れてもの寂しくなり、道筋は一層かすかになった。そしてしまいには、ブラウンを森の暗さの一番深い所に残して、とうとうその道は消えてしまった。けれども、彼の方は、魂を滅ぼされた人間が悪魔へと変るその瞬間に向って、どんどん突き進んでいった。森の中は、木の軋む音や、獣の唸り声や、インディアンのかげろい声などのもの凄いな音に充ちていた。又、風は、或る時は、はるか遠くの教会のチャイムのように微かになり、又或る時には、あらゆる自然が彼を嘲笑ってでもいるかの様に、その旅人のまわりに轟き渡るのであった。しかし、こうした中で、その旅人の姿こそが最も恐怖を誘うものであった。その恐しさは、自分自身の恐しさの故に彼自身が尻込みをする程のものであった。

「ハッ ハ ハ」風がブラウンを笑うかの様に吹いた時、彼は呻いた。「もっと大声で嘲笑う声でも聞かぬぞ。お前達の魔法なんか俺を驚かせるなんて思ったら大間違いだ。悪魔よ来るなら来い！魔法使いやインディアンの魔術師もだ。いや、悪魔自身よ来い。ブラウンはここにいるぞ。俺がお前を恐れる様に悪魔よ、お前も俺を恐れるがよい！」

実際、この化物の巣のような森の中で、ブラウンの姿ほど恐ろしいものは、あり得ないほどだった。彼は、逆上した様子で、杖を振り廻しながら、黒い松の木々の間を飛び廻り、その間中、呼び醒まされた恐ろしい不敬の言葉を吐いたり、森の木霊の全てを笑わせんと笑い喚いたりして、その様子は、彼を取り囲んでいる魔物達そのものであった。本性を表した悪魔といえども、それが人間の心の中で荒れ狂っている時ほどには恐ろしくはないものだ。この悪魔に魅入られた魂は、もの凄いな速さで進んでいった。そして、前方に、木々の間で微かに揺れる赤い火を見て初めて立ち止まった。それは、開拓地の切り倒された幹や枝が燃やされてでもいるかの様で、真夜中の空に向けて、もの凄いな炎を上げていた。彼が立ち止まった時、激情の嵐は、既に、彼の身から引いていた。その時、遠くの方から、大勢の人々による讚美歌のような高まりが聞こえて来た。彼は、その曲に聞き覚えがあった。町の会堂で、聖歌隊がよく歌っていた曲だった。その一節は重々しく消えて行き、コーラスへと変わって行った。しかし、そのコーラスは人間の声によるコーラスというより、未開の荒野に恐ろしくも響き渡るあらゆる音のコーラスであった。ブラウンは大声を挙げた。が、その叫びは、この荒野の雄叫びの中に溶け込んでしまい、彼自身の耳にもとどかなかった。

しばらく沈黙した後、彼はその炎が目には届く位のところまで、こっそりと近づいて行った。ある空地の隅のところに、森の暗い壁に取り囲まれて、一かたまりの岩が突っ立っていた。その岩は、大まかに言えば、どこか祭壇か説教壇に似ていて、四方を4本の燃えている松の木で

囲まれていた。そして、その松の木は、まるで夕べの集いの幟燭の如く幹はそのまま、先方のみが燃えていた。岩の頂に生い繁っている沢山の葉は、全て夜空高く炎を上げながら、その広場全体を明るく照らしていた。一つ一つの垂れ下がっている小枝や葉の飾りも燃えていた。その赤い炎が、大きくなったり、小さくなったりするのにつれて、無数の会衆の顔が、輝き出されたり、影の中に見えなくなったりした。そして、再び人々は、まるでその暗黒の中からの様に湧き上がり、一瞬のうちにこのもの寂しい森の奥を一杯にした。

「威厳にみちた黒衣の人達だ。」とブラウンは叫んだ。

実際、彼等は、ブラウンの言葉通りの人達だった。その人達の中には、暗がりと輝きとの狭間で、あちらこちらに震えながら、次の日になれば州の議会で見られる様な顔が現れた。又その中には、この土地の最も神聖なる説教壇から、安息日ごとに、献身的な様子で天国を見上げたり、教会の椅子に座っている人々の上へと慈悲深い眼差しを送る人達の顔もあった。又、総督夫人さえもがそこに居たと断言する者さえあった。少なくとも、そこには総督夫人と顔見知りの貴婦人や高官達の妻がいたのであった。それから、大勢の未亡人や、際立って徳望のある独身老婦人や、美しい娘達もいたのであった。そして、その娘達は、自分達の母親が自分達を見つけるのではないかと震えていたのであった。その薄暗い広場の上に突然一条の光が走ったことが、ブラウンを眩惑したせいか、彼は、信仰厚きことで名高いサレムヴィレッチの教会員達20人ほどを認めた。老グーキン執事は、既に到着していて、その尊敬すべき聖者、つまりブラウンの敬愛する牧師様の傍で控えていた。しかし、これらの威厳ある、著名な慈悲深い人々たる教会の長老、貞淑な婦人達、清らかな娘達にまじって、不敬にも、自堕落な生活をしている男達、如何わしい風評のある女達、あらゆる卑しい不潔なことに耽るがままの人非人や恐ろしい罪人達と思われる者さえ、いたのだった。善良なる人達が、邪悪ではない人々から身をさげようとしたり、罪人達が信仰厚き人々によって極りの悪い思いをさせられていないことを目にするのは、実に異常なことであった。彼らの敵たる白人達にまじって、インディアンの呪術師もいた。このインディアン達は、イギリスの魔女が知っているいかなる呪文よりも恐ろしい呪文で、これまでずっとこの自分達の森を怯えさせて来たのであった。

「それにしても、フェイスはどこにいるのだろう。」とブラウンは思った。希望がその胸の内に入りこむや、彼は戦った。

もう一つの讚美歌の一節が起った。それはまるで慈悲深い愛を表わすかの様なゆるやかで、悲しげなメロディであった。しかし、そのメロディによって歌われていた歌詞は、我々の本性は罪を理解できるものであること、いや理解する以上のものであることをほめめかす様なものだった。悪魔の知恵は、単に死すべきものたる人間には計り難いのである。讚美歌が次々と歌われた。そして、荒野の合唱が、力強いオルガンの最も深い調べの如く高まって来た。遂に、最後のもの凄いいハーモニーが響き渡り、まるで、たけり狂う風の様な、突進する激流の様な、獣の唸り声の様な音が興った。不協和のあらゆる声、全てのものの君主たる悪魔に敬意を表しながら、罪ある人間の声とまざり合った。四本の燃えている松が炎をおさめると、この邪悪な集りの上に、煙の

輪が出た。と同時に、岩の上の火が赤々と炎を噴き出し、岩のふもとの上の方に燃えるアーチを作った。そしてそこには今や、一人の人物が姿を現していた。恐れ多いことではあるが、その姿は、ニューイングランド教会の威厳のある聖職者に非常によく似ていた。

「改心者よ、前へ！」その叫びは荒野中に響き渡り、森の奥まで鳴り渡った。

その言葉を聞くや、ブラウンは木の陰から進み出て、その会衆に近づいて行った。ブラウンは自分の心の中のあらゆる邪悪なものが共鳴する様な気がしてその人達に、穢れた兄弟としての愛情を感じたのだった。彼はまるで、死んだ彼自信の父親が、煙の輪の中から見下しながら、彼に前へ進み出る様に手招きしていたと誓うことができるほどであった。一方、ぼんやりと見える顔に絶望の色を浮かべて、一人の女が前へ出て来ない様にと手で制した。それは、ブラウンの母であろうか。しかし、牧師と老グーキン執事とが、彼の両脇から手を添えて、その燃えている岩の所へ連れて行った時にも、ブラウンには、たとえ、心の片隅にさえ、一步でも引き返したり、反抗したりする様な気持はなかったのである。そこへ、信仰厚き教義問答の教師であるクロイズさんと、既に悪魔によって地獄の女王たることを約束されていたあの途方もない魔女マルサ キャリアとに導かれて、もう一人の背のスラリとしたヴェールをかぶった女がやって来た。かくて、燃える天蓋の下に、二人の改心者は立ったのであった。

「わが子よ。この人類の聖餐式によくぞ来た。お前達は、これほどの若さで人間というものの本質と必然とを見つけ出したのじゃ。子よ、お前達の後ろを見よ。」とその黒い姿は言った。

二人はそうした。そこは、炎の海の如く、パッと明るく見え、悪魔崇拜者達の顔を見ることができた。そして、その一人一人の顔には、観迎の笑みが輝いていた。

その黒い姿は再び始めた。「ここには、お前達が幼い時から尊敬して来た者達もみな居るのじゃ。お前達は、この者達が、お前達よりも聖なる者と考え、お前達の罪をこの者達の正しい生活や、天に向けての祈りに満ちた大望に照して、お前達自信の罪から身を避けて来たのじゃ。しかし、その者達は、皆、このわしの礼拝の席に居るのじゃ。今宵は、この者達の秘密の行いについて、お前達が知るのを許してつかわそう。つまり、髭も白い教会の長老達が、その家の若い召使い女に向かってどんなに淫らな言葉を吐いたかをじゃ。どんなに大勢の女達が、未亡人の服を着たがって、ベッドで夫に或る飲み物を与え、その胸で、永遠の眠りにつかしたかをじゃ。髭も生えぬ若者達が、その父親の富を嗣がんとをどんなに急いだかをじゃ。そして、いかにして品行方正の娘達が——優しい娘達よ、そう恥しがらんともよいのじゃ——庭に小さな穴を掘り、その赤ん坊の葬儀のたった一人の客として、このわしを招いたかをじゃ。人間らしく、罪の琴線に触れることにより、お前達は、罪を犯したあらゆる場所を、それが教会であれ、寝室であれ、野原であれ、森の中であろうと、全て見つけ出してしまふじゃろう。そして、この地上は、全て罪で穢れ、全く流血の地たることを見て喜ぶじゃろう。これから、ずうっとじゃ。これからは、あらゆる人の心に罪の深い秘密、つまり邪悪な策略の源泉を入りこませるのが、お前達の務めとなろう。その罪の秘儀こそは、どんな行為で表すことの人間の力よりも、いやいや、あらん限りのわし自身の力よりも、もっと邪悪を鼓舞するものとなるじゃろう。さて、わが子よ、互いに見つめ合うのじゃ。」

二人はそうした。燃えている地獄の松明の炎に照らし出されて、その罪深い祭壇の前で震えながら不幸な男は、彼のフェイスを見、又妻を夫は見たのであった。

「見よ、お前達二人はそこにいる。」その黒い姿は深い厳かな調子で言った。その調子は、まるで、その、かつては大天使であったという本性が、未だ我々惨めなるものを嘆く力を残しているかの様に、その絶望的な恐しさの為、殆んど悲しいまでのものであった。「互いの心を頼りとして、お前達は、美德なるものの夢でなきことを願って来たのじゃ。しかし、今やお前達は、夢から醒めたのじゃ。悪魔たることこそが、人間の本性なのじゃ。悪魔たることこそが、お前達の唯一の幸せなのじゃ。子よ、お前達の仲間の聖餐式へよくぞ再びやって来た。」

「よくぞ」と悪魔の崇拜者達も絶望と勝利とがひ交った声で繰り返した。

彼等二人はそこへ立った。しかし、この暗い世界の中で、不道徳に近づくのをまだ躊躇っている夫婦は彼等だけの様に見えた。その岩には、自然に窪んだところができていて水盤の様になっていた。真赤な火に輝き出された水がその中に入っているのだろうか。それともそれは血であったのだろうか。もしくは、どろどろとした炎であったろうか。とに角、その中へ悪魔の姿をした者は片手を浸し、二人の額の上に洗礼の印をつけようとした。つまり行ないにおいても、考えにおいても、二人が罪の秘儀に与る者となり、自分達自身の隠された罪について意識するより、他人の隠された罪についてもっと意識する様にと、なされようとしたのであった。夫は妻を見、フェイスは夫を見た。洗礼を受けた後、初めて見つめ合う時には、自分達が、どんなに穢れた浅ましい人間であるかを互いに知るであろうかを思い、自分達が発いたものと、自分達が見てしまったものにと震えていた。

「フェイス！フェイス！空を見上げろ。この邪悪な奴にはむかうんだ。」夫は大声をあげた。

フェイスが、彼の言葉に従ったか否かは、ブラウンにはわからなかった。彼が言い終るか否かのうちに、彼は、自分が、重々しく、森の中へと消えて行く風の轟きに耳を澄ましながらか、静かな森の中にたった一人であるのに気がついたのであった。彼は岩にもたれかかって呆然とした。そして、その岩が冷たく湿っているのを感じた。一方、先ほどまで全て燃えていたはずの垂れ下がっている小枝は、彼の頬に、ひどく冷たい露を注いだ。

次の朝、ブラウンはまるで当惑した人間の様に、自分のまわりを凝っと見つめながら、足どりも重く、サレムヴィレッジに姿を現した。善良なる老牧師は、墓地沿いに散歩をしていた。それは、朝の食欲を増さんが為でもあり、説教について熟考する為でもあった。そして、通り過ぎながらブラウンに祝福を与えたのだった。しかし、ブラウンは、その敬愛すべき聖者から、まるで呪われた者からの如く身をかかわしたのであった。老グーキンは家庭礼拝中であった。その聖なる祈りの言葉が、開かれた窓から聞こえた。「あの魔法使いは、どの神に祈りを捧げているのだろうか。」とブラウンは言った。かの秀れた老クリスチャンたるクロイズさんは、自宅の格子戸のところに朝早い陽を浴びて立っていて、彼女のところに一パイントの朝のミルクを運んで来た幼い少女に教義問答を教えていた。ブラウンは本物の悪魔からひたたく様にしてその少女をひたたくった。会堂の角のところを曲ると、ピンクのリボンをしているフェイスを認めた。彼女は、気

づかわしげに前の方を見つめていたが、ブラウンを見て、嬉しさが爆発した余り、跳びはねながら彼の方へ近づいて来て、町中の人々の前でその夫にキスせんばかりであった。しかし、ブラウンは厳しく、又悲しげな様子でフェイスの顔をのぞき込むや挨拶一つせずにどんどん進んで行ってしまった。

ブラウンは、森の中で眠ってしまい魔女集会の気狂いじみた夢を見たのだろうか。

それなら、それでよろしい。しかし、ああ何たることか！それは、ブラウンにとっては、悪い前兆の夢であった。あの恐い夢の夜以来、ブラウンは、絶望の人ではないにしても、厳しい悲しい、暗い、もの思いに沈んだ、人を信じぬ男となったのであった。安息日に、会衆が聖なる讚美歌を歌っている時でも、彼はそれを聞くことが出来なかった。というのは、罪を讚美する歌が、やかましく彼の耳に入りこみ、全ての聖なる調べをかき消してしまったからである。開かれたバイブルの上に手を置きながら、牧師が説教壇の上から、強い熱烈なる雄弁をもって、我々の宗教生活の聖なる真実や、聖者のような生活とその勝利を示す死や、死後における無上の喜びを迎えるか言い様のない惨さを迎えるかがどれ程違うかについて話した時も、屋根が、この白髪まじりの冒瀆者の頭上に轟き落ちはしまいかと顔色を変えたのであった。しばしば、真夜中に突然起き上って、フェイスの胸から身をかかわした。又、朝や、夕べに家族の者が祈りの為跪くと、彼は、嫌な顔をして、ぶつぶつと一人言を言い、厳しい顔付きで妻を見つめるや、顔をそむけてしまうのであった。ブラウンが長生きをして白髪の子供となり、今は老女となったフェイスや、子供達、孫達、少なからぬ隣人達や大勢の人々の行列に見守られながら、墓へ連れていかれた時も、人々は、ブラウンの墓碑にいかなる希望の言葉をも刻むことができなかった。というのは、ブラウンの死んだのは暗がりの時であり、彼の生涯も又暗がりの一生であったからである。

[Text] Nathaniel Hawthorne, Young Goodman Brown, 1835

<Newton Arvin (ed), Hawthorne's Short Stories, New York pp. 165~179>.

[参考資料]

「原田敬一教授講義ノート」(於千葉大学人文学部, 1975)。

小山敏三郎編注『詳注 ホーソン短編集 I』(南雲堂, 1973)。

小島信夫「若いグッドマン・ブラウン」<大橋健三郎編『アメリカ短編名作集』(学生社, 1961) pp. 7~23>.

Wilfred L. Guerin et al., A Handbook of Critical Approaches to Literature, New York & London, 1966。